

# 地蔵盆にみる異年齢集団による子どもの発達環境

## ー加賀市の南郷地区・大聖寺地区を事例としてー

中谷 崇<sup>\*1</sup>, 小伊藤 亜希子<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>フリー

<sup>\*2</sup>大阪市立大学大学院生活科学研究科

## The Development Environment of Children in Mixed-Age Groups Formed in the Jizo-bon : A Case Study of the Nango and the Daishoji Areas in Kaga-City

Takashi NAKAYA<sup>\*1</sup> and Akiko KOITO<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>Freelance

<sup>\*2</sup>Graduate School of Human Life Science, Osaka City University

### Summary

It is important for children to play outside in large, mixed-age groups of people. In order to guarantee an environment for their development, this study analyzed and evaluated the structure and role of the Jizo-bon that is carried out by children in Kaga-city. The Jizo-bon is an event that allows children to interact in a mixture of two age groups for the first time. Children usually play indoors in small, similar-aged groups. However, it was found that the Jizo-bon is a valuable opportunity that provides diverse experiences since different groups than usual organize it. It was also found that a symbolic space of the mixed-age group hierarchy exists at the location of Jizo-bon activities. But recently, as these situations weaken in deep relation to the changes in everyday playgroups, it is becoming more difficult to carry out the Jizo-bon under children's leadership. By categorizing the core groups that carry out each community's Jizo-bon into three types and analyzing their transition, a tendency for transition from "children-led" to "adult-supported" to "adult-led" was found. Several suggestions are described since the Jizo-bon is increasingly important because of the reduction in mixed-age group play experience, although its role in the development environment is decreasing.

**Keywords** : 子ども, 遊び, 地蔵盆, 異年齢集団, 発達環境, 象徴的空間

*Children, Play, Jizo-bon, Mixed-age Group, Development Environment, Symbolic Space*

## 1. 研究の背景と目的

### 1-1. 研究の背景

戦後、生活様式の変化に伴い子どもの生活や遊び方も様変わりした。遊びの黄金時代<sup>1)</sup>と言われる1950年代は殆どの時間を外で遊び回ることが当たり前で、集団を形成し年齢が異なる子と関わりながら遊ぶことが多かった。しかし、次第に屋外遊びが減少し、家の中で電子ゲーム<sup>2)1)</sup>、カードゲーム、等に興じることが多くなった今では、年齢が異なる子はおろか遊ぶ集団の人数も減ってきて

いる。このような状況となった原因の1つは、地域における関係性の希薄化にあると思われる。

### 1-2. 研究の目的

本研究は、加賀市の年中行事、「地蔵盆」を取り上げる。主に地蔵盆は西日本に見受けられ、京都市の地蔵盆が有名であるが、本地蔵盆は、大人の手を借りずに子どもが主体となって行事の運営や準備(以下:運営等)を行っており、小学生から中学生までの異年齢集団による活動であるところに大きな特徴がある。そこで本研究は、遊びの集団形

成に着目しながら、地域社会が子どもの発達を保障する仕組みにおける地蔵盆の役割を評価するものである。具体的には①対象地域における子どもの遊び集団と遊び内容の時代毎の変化、②異年齢集団の形成における地蔵盆が果たす役割、③地蔵盆時の異年齢集団の活動の場となる拠点空間の特徴と変化、を明らかにする。

## 2. 研究の位置付け

地蔵(盆)に関する既往研究としては、都市空間における地蔵の配置を考察した竹内泰の研究<sup>2)</sup>、地蔵盆における近隣空間について言及した野口美智子や高橋一雄の研究<sup>3) 4)</sup>があり、いずれも京都市における事例を基にし、都市空間における地蔵(盆)の物理的な位置関係の考察を主眼としている。また、西村ほか2名は京都市の事例より、子どもにおける発達保障の空間づくりについて考察<sup>5)</sup>を行っており、本研究の目的に大変近く、参考となる。これらの研究を踏まえ、本研究では伝統的に子どもが主体となり、子どもの異年齢集団の形成における要素を強くもつ加賀市の地蔵盆を取り上げ、その特徴と普段の遊びとの関連を捉えようとしているところに特徴がある。

## 3. 調査の方法

2004年調査時点と昔の子どもにおける地蔵盆の状況及び子どもの遊び(普段と地蔵盆)を把握するために調査を実施した。調査から8年が経過しているが、概ね1970年代以前との比較において、近年のまでの変化をたどるという意味でなお価値があると考ええる。以下、調査時点を「2004年」と表示する。各調査の位置付けは表1に示すとおりである。

ここで本研究において2004年と対比する「昔」について言及する。子どもが20人を超える大集団で遊んでいた全盛期は、1950年代と言われている<sup>1)</sup>。戦後から今に至る遊びの区分については、河崎<sup>1)</sup>、仙田<sup>6)</sup>、藤本<sup>7)</sup>らが各々提唱しているが、これらを参考にすると概ね①戦後から1960年まで(遊びの黄金時代)、②1960年から1975年(屋外遊びと屋内遊びが逆転する時期)、③1975年以降(テレビゲームが普及する時期)に区分することができる。これらを踏まえて、1975年時点で10才以上であった人、

すなわち調査時点で40才以上の人を遊びに関するヒアリング調査の対象とし、その子ども時代を「昔」として現代との遊びの比較を行う。ただし、地蔵盆の変遷に関するヒアリングについては40才以下も含めるものとする。調査対象については、加賀市における地蔵盆実施の有無、実施日、実施方法、等の情報収集を行い、①現在実施していること、②昔の地蔵盆についてヒアリング調査ができること、③農村と城下町のどちらも含まれること、の条件に合致するように、南郷地区・大聖寺地区<sup>注2)</sup>から計9町を選定した。調査は以下の手順により行った。

表1. 調査項目・内容の整理

対象時期	地蔵盆	遊び
2004年	①実態調査	③アンケート調査
	参加者	属性
	日程	年齢、性別、居住町名
	拠点	兄弟の有無
	催し	自家の有無
		家庭・地域の役割の有無
昔	②実態ヒアリング調査	遊び
	参加者	参加の有無
	日程	参加の時間帯
	拠点	集団数、学年層
	催し	時間帯、種類
		場所(行動範囲を含む)

### ①2004年の地蔵盆実態調査

南郷地区6町と大聖寺地区3町の計9町を調査対象とし、地蔵盆の実態調査及び可能な限り地蔵盆の最年長参加者(大人を含む)に対するヒアリング(内容は表1に示す)を行った。ヒアリングへの協力を得られたのは6町6人であった。ヒアリング対象者一覧を表2示す。調査時期は2004年8月である。

表2. 2004年の地蔵盆実態調査、ヒアリング対象者一覧

番号	ヒアリング対象者	性別	町名	地区
1	中学3年	男	上河崎町	南郷
2	中学3年	男	下河崎町	
3	中学3年	男	吸坂町	
4	中学3年	男	保賀町	大聖寺
5	老人会	男	永町	
6	保護者	男	藤ノ木町	

## ② 昔の地蔵盆実態ヒアリング調査

調査対象範囲の居住者の中から、なるべく年齢が分散するように考慮しながら、協力者を介して、幼少期より当該地区に居住し、地蔵盆を体験している 20 代～80 代の調査協力者を募り 12 名の協力を得て、子ども時代の遊びと地蔵盆に関するヒアリング調査を行った（表 3）。調査時期は 2004 年 10 月である。

表 3. 昔の地蔵盆のヒアリング調査対象の一覧

番号	年齢層	性別	町名	地区
1	80代	男	上河崎町	南郷
2	50代	男	黒瀬町	
3	70代	男	黒瀬町	
4	20代	男	下河崎町	
5	50代	男	下河崎町	
6	40代	男	吸坂町	
7	20代	男	吸坂町	
8	40代	男	南郷町	
9	60代	男	南郷町	
10	40代	男	保賀町	
11	60代	男	荻生町	大聖寺
12	60代	男	永町	

## ③ 2004 年の地蔵盆と遊びに関するアンケート調査

調査対象範囲に住む小・中学生を対象とし、2004 年の地蔵盆と遊びに関するアンケート調査を実施した。調査対象範囲の協力者を介して 80 通を配布し、郵送により 22 通（6 町）を回収した（表 4）。有効回収率は 27.5% である。調査時期は、2004 年 10 月である。

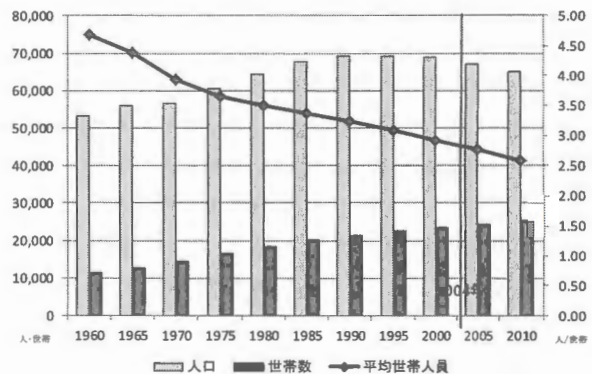
表 4. 2004 年の地蔵盆と遊びに関するアンケート回答者一覧表

番号	学年	性別	町名	地区
1	中学1年	男	上河崎町	南郷
2	中学3年	男	黒瀬町	
3	中学3年	男	黒瀬町	
4	中学3年	男	黒瀬町	
5	中学3年	男	黒瀬町	
6	小学2年	男	下河崎町	
7	小学3年	男	下河崎町	
8	小学6年	男	下河崎町	
9	小学6年	男	下河崎町	
10	中学2年	男	下河崎町	
11	中学2年	男	下河崎町	
12	小学1年	女	吸坂町	
13	小学2年	男	吸坂町	
14	小学5年	女	吸坂町	
15	小学6年	男	吸坂町	
16	小学6年	女	吸坂町	
17	中学2年	男	保賀町	
18	中学3年	男	保賀町	
19	中学3年	男	保賀町	
20	小学5年	男	保賀町	
21	小学6年	男	保賀町	
22	中学2年	男	荻生町	

## 4. 加賀市の概要

### 4-1. 加賀市

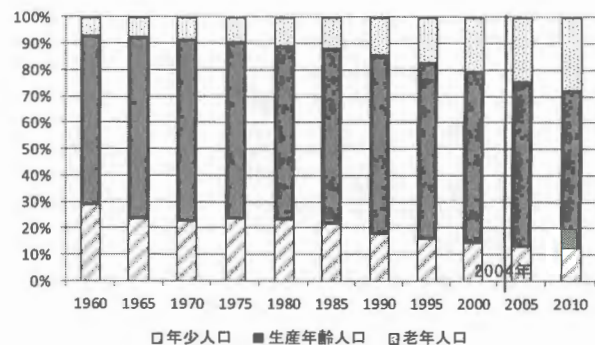
加賀市は石川県の最南端に位置し、東南部の山地を背に日本海に面しており、東部は小松市、あわら市に接している。また、地勢は東南に高く、白山連邦を望み、白山山系の大日山、富士写ヶ岳を源とする大聖寺川と動橋川と平野を貫き、日本海に注いでいる。加賀市の人口は 1995 年をピークに減少しているが、世帯数は増加し続けている（図 1）。また、年齢構成は少子高齢化が進展している状態である（図 2）。また、加賀市は農村が大半を占める地域であり、かつては農業が盛んであったが、近年では農家の総数が急激に減少している。戦後以降は農家のあり方が変化していき、農家からサラリーマンに業種を代える人が増加したことや農業の効率化や技術向上により 1 農家当たりの収穫面積が拡大したことも要因の 1 つとして挙げられる（図 3）。



※1 出典：加賀市統計書

※2 2006年以降は2005年に合併した山中町の数値は除く

図 1. 加賀市の人口・世帯・平均世帯人員の変化

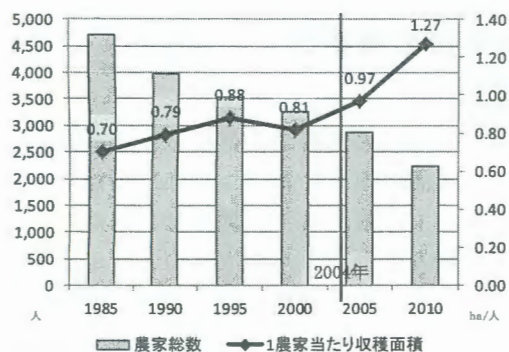


※1 出典：加賀市統計書

※2 2006年以降は2005年に合併した山中町の数値を含む

図 2. 加賀市の年齢別人口構成の変化





※1 出典: 農林業センサス  
 ※2 平成7年以前は収穫面積、平成12年以降は作付面積を掲載  
 ※3 2006年以降は2005年に合併した山中町の数値は除く  
 ※4 右軸の単位は総農家数(人)、  
 左軸の単位は1農家当たり収穫面積(総収穫面積(ha)/総農家数(人))

図3. 加賀市の農家数と1農家当たり収穫面積の変化

#### 4-2. 南郷地区・大聖寺地区

本研究の調査対象範囲は、大聖寺藩の城下町であった大聖寺地区と加賀市の典型的な農村である南郷地区である。地蔵には標識としての役割もあり、加賀市には地蔵が多く点在している。また、地蔵は道祖神信仰と混合して、人々の信仰の対象として崇められ、集落の結界に石(神石)を置き疫病や禍が入らないように祈りの意味が込められている。図4は「加賀市地蔵等分布図・一覧表<sup>8)</sup>」に基づき、調査対象範囲である南郷地区・大聖寺地区における地蔵の位置を示したものである。この図を基に現在の地蔵の位置を確認し、実態調査における基礎情報とした。住宅地が集積している地域が大聖寺地区であり、かつて城下町であった区域の周辺に地蔵が置かれている。また、集落(以下: 町を含めた一単位を「集落」と呼称)が点在している地域が南郷地区であり、集落の入り口や集落の中心に地蔵が置かれている。



地区	町名	整理番号
南郷	上河崎町	52
	黒瀬町	45、46、50
	下河崎町	53
	吸坂町	51
	南郷町	54～57
	保賀町	43
大聖寺	荻生町	104、105
	永町	120
	藤ノ木町	117

※調査対象集落のみ表示

図4. 南郷地区・大聖寺地区の地蔵分布図

#### 4-3. 年中行事と主体

加賀市では地蔵盆の他にも多くの集落に共通した行事があり、獅子舞、春・秋祭り、左義長<sup>注3)</sup>、報恩講<sup>注4)</sup>、盆踊り、等が挙げられる。その中でも獅子舞は、集落に住む高校生から25歳位までの者で構成される青年団(10年前に地蔵盆を行っていた集団と重なる)が担い、豊作の祈願と感謝のために年2回、集落の家々で獅子舞を行う。地蔵盆と比較すると、獅子舞では遊びの要素も残っているものの、集落のためという使命感・義務感の方が大きく、また体力を要する。こうして青年達は廻りながら、自ずと集落に住む人の状況を把握し、宗教観と集落の認識を地蔵盆とは違う角度で深めていく。これらを踏まえると、獅子舞は地蔵盆の次に用意されている、集落の一員としての役割を果たす行事であると言える。

年中行事の中でも春・秋祭り、左義長、盆踊り、等は集落の老若男女が参加できる全世代で行われるものである。これらは「ハレとしての体験」(春・秋祭り、盆踊り)、「宗教観・倫理観」(左義長)を獲得する場として機能している行事(以下: 一般行事)と位置付けられる。それに対して、地蔵盆、獅子舞、報恩講は特定の世代で行われる行事(以下: 特定世代行事)と位置付けられる。

発達心理学では年齢別に発達段階を設定するのが一般的であり<sup>注5)</sup>、各発達段階において、獲得・達成することが期待される発達課題があるとされている<sup>注6)</sup>。特定世代行事を発達段階に対応させると、地蔵盆は児童期と青年期、獅子舞は青年期と成人期に対応し、2つの発達段階をまたがることによる異年齢集団が一堂に集結し、目的に向かい物事を遂行していくことに存在意義がある。そして、集落自治を担う成人期から壮年期を経て引退する

中谷・小伊藤：地蔵盆にみる異年齢集団による子どもの発達環境—加賀市の南郷地区・大聖寺地区を事例として—

と、再び老年期に対応した報恩講という行事が用意されている（表 5）。つまり、各発達段階に対して行事と役割があり、一つの特定世代行事が本質的に区分された 2 つの発達段階をまたがることにより、普段では形成されにくい異年齢との交流ができる場が用意され、それらを経て一人の大人として、また集落の一員として、成長が促されているシステムとなっている。

表 5. 発達段階と年中行事の関係整理表

発達段階	年中行事	
	特定世代行事	一般行事
児童期 (6～12歳)	地蔵盆 (6～15歳)	・左義長 ・春、秋祭り ・盆踊り
青年期 (13～22歳)	獅子舞 (15歳～20代)	
成人期 (20代～30代)	集落自治 (30代～50代)	
壮年期 (40代～50代)	報恩講 (60代～)	
老年期 (60代～)		

#### 4-4. 年中行事における地蔵盆

年中行事の中でも、児童期と青年期にまたがる地蔵盆は、地蔵盆以降の発達課題を達成するために必要な人間関係の形成、集団行動、倫理観の習得、等と言った基礎的な課題が含まれている。普段の遊びの延長線上にある地蔵盆は、子どもにとって馴染みやすい形で、集落で生活する一員として成長していく仕組みを内包しており、集落と子どもを初めて結び付ける役割としての機能もある。

## 5. 地蔵盆の概要

### 5-1. 地蔵盆の参加者

加賀市の地蔵盆の期間は主に 8 月 23 から 25 日であり、準備・片付けを含めると、最大 5 日間という集落もある。地蔵は集落単位に存在し、地蔵盆の参加者は、主にその集落に住む小・中学生の男子である。また、長男のみが参加し、次男以降は参加できない集落もある。近年では集落によっては女子を含めたりと、参加者の構成員が変化する傾向がある。そして、地蔵盆の運営等においては、その年々の年長者が取り仕切り、子どもが主体的

に行うことが特徴的である。年長者である中学生が指示し、小学生が実行するという指示体系が形成されるのが一般的である。しかし近年は、子どもだけで行うことが困難な状況も生じている。

### 5-2. 地蔵盆の催し

地蔵盆での催しの 1 つに「お賽銭集め」がある。お賽銭は子どもではなく地蔵に対してであり、子どもが大人に呼び掛けて祀っている地蔵まで来てもらったり、地蔵を移動させて人の往来が多い場所に陣取ったりして、お賽銭をもらうものである（写真 1）。この催しは、伝統行事として加賀市では広く人々に認められ根付いており、他の地域では見られない加賀市における地蔵盆の一番の特徴である。また、地蔵の命日である 8 月 24 日に、近くのお寺の住職が御経を唱え供養する「お参り」がある。お参り時になると、集落の大人も地蔵の前に集まる。この 2 つの催し以外の時間は、子どもは、全員で一日中遊び回っている。この期間中はいくら夜遅くまで遊んでも大人から注意されないため、この日を楽しみにしている子どもは多い。

### 5-3. 地域の理解

加賀市の地蔵盆が子ども主導で運営されているとしても、現実には地蔵盆に対する大人の理解が不可欠である。特にお賽銭集めに関しては、かつて大人自らも地蔵盆を体験しており、子どもにお賽銭を渡す大人がいることで初めて成立するのである。ただし、近年では市外からの新規転入者のように地蔵盆を知らない人が増加したこと等により、このような認識に差が生じているのが現状である。しかし、集落全体の理解・認識を背景として、地蔵盆が成立しているのは確かである。



写真 1. お賽銭集めの様子



## 6. 地蔵盆と遊び

### 6-1. 普段の遊びの状況

昔の子どもは 2004 年の子どもに比べ、自分の部屋が無いことが多かった。それが屋内遊びに影響している可能性がある（今回の調査では、昔の子どもは 10 人中 3 人、2004 年の子どもは 22 人中 21 人が自室を所有）。そこで、昔は外で、2004 年は内で遊ぶと単純に捉えるのではなく、遊びとその場所の関係性に着目して分析を行う。例えば、草野球等は、ある一定規模の屋外空間と野球が成立する人数が必要な遊びだが、一方でビー玉遊びやメンコ（パス）等は、最低 2 人でも成立し、外でも内でも遊ぶことができる。つまり、同じ屋外遊びでも一定規模（広範囲）の場所が必要な遊び（以下：屋外的遊び）と、広範囲の場所を必要としない遊び（以下：屋内的遊び）に区分することができる（図 5）。

昔と 2004 年の遊びを上記の定義により整理した上で、昔における普段と地蔵盆の遊びを比較する（表 6）。昔の子どもにおける遊びの状況は、集団規模は 10 人程度が多く、概ね自分の学年の 1, 2 学年前後を中心にそれ以上と幅広い異年齢集団が形成されていることが分かる。遊びの種類は、エスケン、チャンバラ、川遊び、草野球のように広い屋外空間と一定の人数で成立する屋外的遊びが多く見られる。これらの遊びの特徴は、異年齢集団で遊ぶことで人間関係を築いていくことにある。加えて、スギ鉄砲や竹スキー等の手作りの遊び道具での遊びは、そのための材料（竹、木、等）が生えている場所に行く必要があるため、集落内の認識が深まる。一方、2004 年の子どもにおける普段の遊びの状況は、3~5 人が中心で（平均 4.4 人）、殆どが同級生で構成されており（同級生のみでの遊び：約 76%）、集落という単位でなく、学校のクラスの繋がりや延長が遊び集団となっていることが分かる（表 7）。遊びの種類は、屋外的遊びと屋内的遊びがほぼ半々であるが、屋外的遊びも鬼ごっこやかくれんぼ等が 6 割、野球やドッジボール等が 4 割という内訳であり、昔と比べると遊びの多様性は減少している。屋内的遊びでは、お絵かき、楽器も少しあるが、ゲーム（電子ゲーム）、カードゲームが圧倒的である。遊び内容や遊び集団の学年による明らかな違いは、本調査結果からは得られなかったが、電子ゲームやカードゲームは小学

校低学年にも浸透しており、一方で缶蹴りや鬼ごっこのような屋外的遊びは中学生にも見られた。

戦前から現代まで、遊びは世代を超えて継承されてきたが、現状においては遊び集団が縮減したことで屋外的遊びが継承されにくい状況となっていることは確かである。また、調査対象範囲は都心部と異なり、市街化はしているものの、昔と比較しても外で遊ぶための場所が無くなっているとは言えない。つまり、屋外的遊びを行うための場所が無いために屋内的遊びが増加したとは言えず、異年齢集団による多人数遊びの崩壊が遊び方をある程度規定していると推測される。

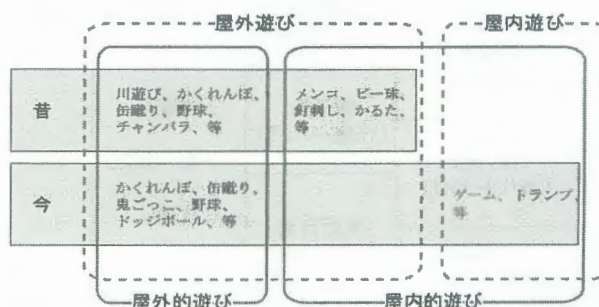


図 5. 遊びの性質整理図

### 6-2. 地蔵盆の催しと遊び

地蔵盆では、テント・小屋や、昔においてはやぐら<sup>注7)</sup>を拠点として、お賽銭集めやお参り等の催しが行われる（写真 2）。子どもにとって、これらは強制されるものではなく、基本的に子どもが全て取り仕切って自主的に行うものである。特にやぐら作りはテントの設営と比べると技術的に難しいが、作り方はこれまでの先輩達から引き継がれており、上級生が指示しながら作られていく。子どもからすると秘密基地を作るように遊びの延長として取り組んでいたと推測される。2004 年ではやぐら作りは行われなくなっており、お賽銭集めも昔ほどは活発には行われなくなっている。



写真 2. テントの拠点

中谷・小伊藤：地蔵盆にみる異年齢集団による子どもの発達環境—加賀市の南郷地区・大聖寺地区を事例として—

催し以外の時間には、普段の遊びも見受けられるが、夏という季節、夜中まで確保された長い時間は子どもにとって特別な体験をする時間となる。つまり、地蔵盆の催しは遊びに近い存在であり、

催し以外も殆ど遊んでいるため、子どもにとって地蔵盆自体が遊びの集合体のような存在であると言える。

表 6. 昔における普段の遊びと地蔵盆の遊びの比較表

年齢層	性別	町名	自室の有無	普段の遊び			地蔵盆の遊び			比較(※1)	
				遊びの種類	年齢層	人数	遊びの種類	年齢層	人数	年齢層	人数
40	男	吸坂町	無	缶蹴り、かくれんぼ、川遊び パス、ビー玉、釘刺し	同級生と一つ下	3,4人	お寶銭集め やぐら作り	小1～中3	15,6人	△	△
	男	南郷町	有	馬鹿び、野球、サッカー、秘密基地作り ゴム跳び、ナンパ、缶蹴り、縄跳び ビー玉、めんこ、泥団子作り	上下3歳位	7,8人	お寶銭集め やぐら作り	小・中学 (男女)	14,5人	△	△
	男	保賀町	有	川遊び、釣り、竹スキー、ゴロ野球 陣取り、縄跳り、果物探り	同級生と下1歳	5,6人	お寶銭集め やぐら作り	小1～中3	30人位	△	△
50	男	黒瀬町	無	ドロケイ、じんが(陣取り合戦)、チャンバラ 川遊び、ソフトボール、雪合戦、ビー玉	上下2・3歳位	20人位	お寶銭集め やぐら作り	小4～中3	30人位	-	△
	男	下河崎町	無	缶蹴り、かくれんぼ、チャンバラ、釣り けんぱ、釘刺し、パス、ビー玉	小・中学生	10～14,5人	お寶銭集め やぐら作り	小1～中3	12,3人	-	▲
60	男	南郷町	無	川遊び、野球、鳥を捕る、竹スキー パス、ビー玉、漫画、トランプ、かるた	上下2歳位	10人位	お寶銭集め やぐら作り	5・6年生	15,6人	▲	△
	男	荻生町	無	竹スキー、川遊び、スギ鉄砲	上下5・6年位	10人位	お寶銭集め やぐら作り	小・中学	30人位	△	△
	男	永町	有	エスケン、チャンバラ、ひーばんかーとーばん 陣取り、竹スキー、釘刺し、パス、ビー玉	同級生	4,5人	お寶銭集め (地点不明)	小3～6	6,7人	△	△
70	男	黒瀬町	無	じんが(陣取り合戦)、独奏、かくれんぼ 川遊び、竹スキー、ビー玉、パス、	上下2歳位	15,6人	お寶銭集め やぐら作り	小4～6	20人位	▲	△
80	男	上河崎町	無	陣取り、縄跳び、かくれんぼ、野球、 川遊び、兵隊ごっこ、チャンバラ	上下2歳位	10人位	お寶銭集め やぐら作り	小5～高等2	20人位	△	△
						平均人数	9,9人	平均人数	19,5人		

凡例

本文 屋外の遊び  
△ 年齢層拡大または人数増加  
▲ 年齢層縮小または人数減少  
- 変化なし

年齢層：調査年度(2004年)を基準としたもの；20(代)

※1地蔵盆の遊びと普段の遊びを比較する上での基準は、遊びが複数ある場合、年齢層に広い方を人数は多い方を選択し、比較する。

「昔の地蔵盆実態ヒアリング調査」の結果を参照  
ただし、当初の意図とは異なっていたため、「今の地蔵盆と遊びに関するアンケート調査」とは抽出できた内容が異なる。

表 7. 2004 年における普段の遊びと地蔵盆の遊びの比較

属性			普段の遊び				地蔵盆の遊び				比較(※)	
町名	性別	学年	遊び				遊び				年齢層	人数
			種類	場所	年齢層	人数	種類	場所	年齢層	人数		
上河崎町	男	中学1年	1 野球	外	同級生	9人～	ゲーム	内	中学生	5人	△	▲
		2					トランプ	内	中学生	5人		
	男	中学3年	1 トランプ	内	同級生	3～4人	-	-	-	-	×	×
	男	中学3年	1 ゲームセンター	内	同級生	3～7人	トーク	内	同級生	4人		
黒瀬町		2	ゲーム	内	同級生	3～4人	バトミントン	外	同級生	4人	-	▲
		1	トランプ	内	同級生	5人	トランプ	内	同級生	4人		
	男	中学3年	2 楽器	内	同級生	4人	歌を聴く	内	同級生	4人	-	▲
		3	のんびり	内	同級生	3人						
		1	トランプ	内	同級生	3～4人	山で遊ぶ	外	同級生	4人	-	-
	男	中学3年	2				バトミントン	外	同級生	4人		
下河崎町	男	小学2年	1 球技(野球、サッカー)	外	同級生・上級生	2～8人	-	-	-	-	×	×
		2	カード	内	同級生	2～4人						
		3	ゲーム	内	同級生	2～3人						
		1	ドッジボール	外	同級生	8人	陣布団投げ	内	上級生	5～6人		
		2	鬼ごっこ・かくれんぼ	外	上・下級生	5～6人	ゲーム	内	上級生	2人	△	▲
		3	ゲーム	内	同級生	2人	本	内	上級生	2人		
	男	小学6年	1 カードゲーム	内	4～6年生	5～6人	カードゲーム	内	小学生	4～5人	△	△
	男	小学6年	2 テレビゲーム	内	同級生	1～4人	陣布団投げ	内	小学生	9～10人		
	男	小学6年	1 カードゲーム	内	同級生	3～4人	トランプ	内	小学生	5～6人	△	△
	男	中学2年	1 ゲーム	内	同級生	3～4人	肝試し	外	小・中学生	10,11人	△	△
	男	中学2年	2 缶蹴り	外	同級生	3～4人						
	男	中学2年	1 ゲーム	内	同級生	2～4人	外で遊ぶ	外	小・中学生	1～9人	△	△
吸坂町	女	小学1年	1 お絵かき	内	同級生	3～4人	ゲーム	内	1人	1人	▲	▲
		2	お絵かき	内	兄弟	2人						
	男	小学2年	1 野球	外	同級生	5～6人	ゲーム	内	不明	10人～	×	△
		2	ゲーム	内	兄弟	2～3人						
	女	小学5年	1 ゲーム	内	同級生	3～6人	ゲーム	内	不明	10人～	×	△
	男	小学6年	1 ゲーム	内	同級生	4～5人	肝試し	外	小・中学生	12,13人	△	△
		2	ドッジボール	外	同級生	9人	トランプ	内	小学生	5～6人		
	女	小学6年	2 鬼ごっこ	外	小学生	5～6人					△	▲
		3	隠れ鬼	外	同級生	2～3人						
	男	中学2年	1 釣り	外	不明	3～4人	缶蹴り	外	小・中学生	5～12人	△	△
		2	ゲーム	内	不明	3～4人	鬼ごっこ	外	小・中学生	5～12人		
	男	中学3年	1 鬼ごっこ	外	同級生	4～5人	缶蹴り	外	小・中学生	10人～	△	△
保賀町		2	あて鬼	外	同級生	4～5人	ダルマさんが転んだ	外	小・中学生	10人～		
	男	中学3年	1 鬼ごっこ	外	同級生	5～6人	缶蹴り	外	小・中学生	7～8人	△	△
		2	ゲーム	内	同級生	5～6人						
	男	小学5年	1 ゲーム	内	小1～5年	5～6人	肝試し	外	小・中学生	13,14人	△	△
		2	鬼ごっこ	外	小1～5年	4～5人						
荻生町	男	小学6年	1 ぼこべん	外	同級生	5～6人	花火	外	小・中学生	10,11人	△	△
		2	ゲーム	内	同級生	3～4人	肝だめし	外	小・中学生	10,11人		
荻生町	男	中学2年	1 野球	外	同級生	9～10人	-	-	-	-	×	×
		2	ゲーム	内	同級生	2～3人						
						平均人数	4.4人	平均人数		6.8人		

凡例

本文 屋外の遊び  
△ 年齢層拡大または人数増加  
▲ 年齢層縮小または人数減少  
- 変化なし  
× 比較対象が不明

※ 地蔵盆の遊びと普段の遊びを比較する上での基準は、遊びが複数ある場合、年齢層に広い方を人数は多い方を選択し、比較する。  
※ 遊びの種類が「ゲーム」とあるが、ほとんどがテレビゲームと判断できる。  
「今の地蔵盆と遊びに関するアンケート調査」の結果を参照



### 6-3. 地蔵盆と遊びの関係性

昔の遊びについては表 6 に、現代の遊びについては表 7 に、それぞれ遊びの内容、集団の規模と年齢層を示し、地蔵盆の遊びを普段の遊びと比較する。昔については(表 6)、人数は普段からも多いが、地蔵盆にはさらに増加して大集団を形成し、年齢層も広がっている。2004 年については(表 7)、昔よりも全体的に遊び集団規模は縮小しているが、それでも地蔵盆の集団規模は普段より大きく、年齢層も広がっていることがわかる。つまり昔も 2004 年も、基本的に地蔵盆時には集団の規模も年齢層も拡大している。特に現代においては、普段の遊びが少人数、同学年に限定される傾向が強まるなか、集落に住む子どもが、このように一堂に集まる機会は貴重である。

昔の遊びについては、基本的には屋外的遊びが大半であることは前述の通りであるが、地蔵盆には肝試しや花火のような夏の夜ならではの遊びも見受けられる。2004 年では、ゲーム(テレビ、カード、等)のような普段の屋内的遊びが地蔵盆にも持ち込まれる傾向があるが、屋外的遊びについては 7、8 人で缶けり等をしている集落も見られ、また多くの集落で伝統的に行われてきた肝試しが 2004 年でも継承されていることがわかる。

## 7. 地蔵盆の空間

### 7-1. 活動拠点の存在

地蔵盆では子どもが活動するため、やぐらのような仮設的な空間を設け、近年テントを設営したり、テントや小屋に地蔵を持ち込んだりして拠点としている。この拠点を設える際に入口又は奥に地蔵を配置し、地蔵を中心に飾付けが施され、その周りには花、お供え物(果物、お菓子、等)、ロウソク、等が設えられ、地蔵盆の拠点には提灯、幕が飾付けられ、昔と比較すると簡略される傾向にはあるものの、ハレの日を象徴した地蔵盆の空間が演出される(写真 3)。

ここが、その中で遊んだり、話をしたり、催しや遊びの合間に休憩したりする場所となり、まさに活動の拠点なのである。昔は拠点となるやぐらを子どもだけで作っており、異年齢集団には、そのための技術・素養が備わっていた。これは自然に習得したわけではなく、上級生から直接教えてもらったり、上級生が作っている様子を見て盗んだ

りして覚える、すなわち共同作業を通じて、上下関係の形成や連帯感を培っていく異年齢集団の中で継承されるシステムが存在したのである。しかし、1970 年あたりからやぐらとテントを併用する拠点が現れ、2004 年ではやぐら作りは無くなっており、テントや既設の小屋等を拠点とすることが多くなっている(図 6)。



写真 3. 現在の飾付け例

### 7-2. 象徴的空間の発現

地蔵盆の拠点には、飾付けによる演出効果と併せて象徴的な空間(以下:象徴的空間)、すなわちヒエラルキーをもつ空間が発現する。つまり、地蔵盆に参加している上級生・下級生という関係性が空間に現れ、上級生のための特別な空間が確保されるのである。これは、地蔵盆における子どもの異年齢集団の中で、上級生が課された責任・役割と引き替えに獲得する特権的な地位が象徴的に現れた空間と言える。発達心理学においては児童期から青年期にかけて特有の時期を指す「ギャングエイジ<sup>9)</sup>」という概念がある。具体的には小学校 5・6 年生から青年期前期に見られ、ほぼ同年齢の子ども、非常にまとまりの強い閉鎖的な集団を形成し、大人からの干渉を避け、自分たちで物事を決める傾向がある。つまり、ヒエラルキーによる特権的なこの空間は下級生の憧れを伴いながら、ギャングエイジである上級生の閉鎖的な集団性を保障し、仲間の連帯感を獲得する基地として機能していると考えられる。また、児童期と青年期の発達段階の構造を反映する地蔵盆を象徴した空間でもある。

図 6 は集落毎の拠点(種類と拠点内に生ずるヒエラルキー有無)の変遷を示したものである。空間構成の変遷を分析すると、昔は象徴的空間に上級生だけの空間が確保されているが、2004 年にな



ると当該空間が無くなりつつあることがわかる。また 2004 年では、城下町集落の 1 集落ではヒエラルキーなく、もう一つは子ども自体が参加していない状態である。一方、農村集落では 4 つの内 3 つでは、ヒエラルキーが存在していることがわかる。ただし、近年は象徴的空間が曖昧となる傾向にあり、上級生が役割と責任を担う上下関係が薄れつつあることと関連していると考えられる。

## 8. 地蔵盆の主体

### 8-1. 主体の型

本地蔵盆は伝統的に子どもを主体として実施されてきたが、近年ではその主体のあり方に変化が生じている。ここでは主体の型を以下の 3 つに分

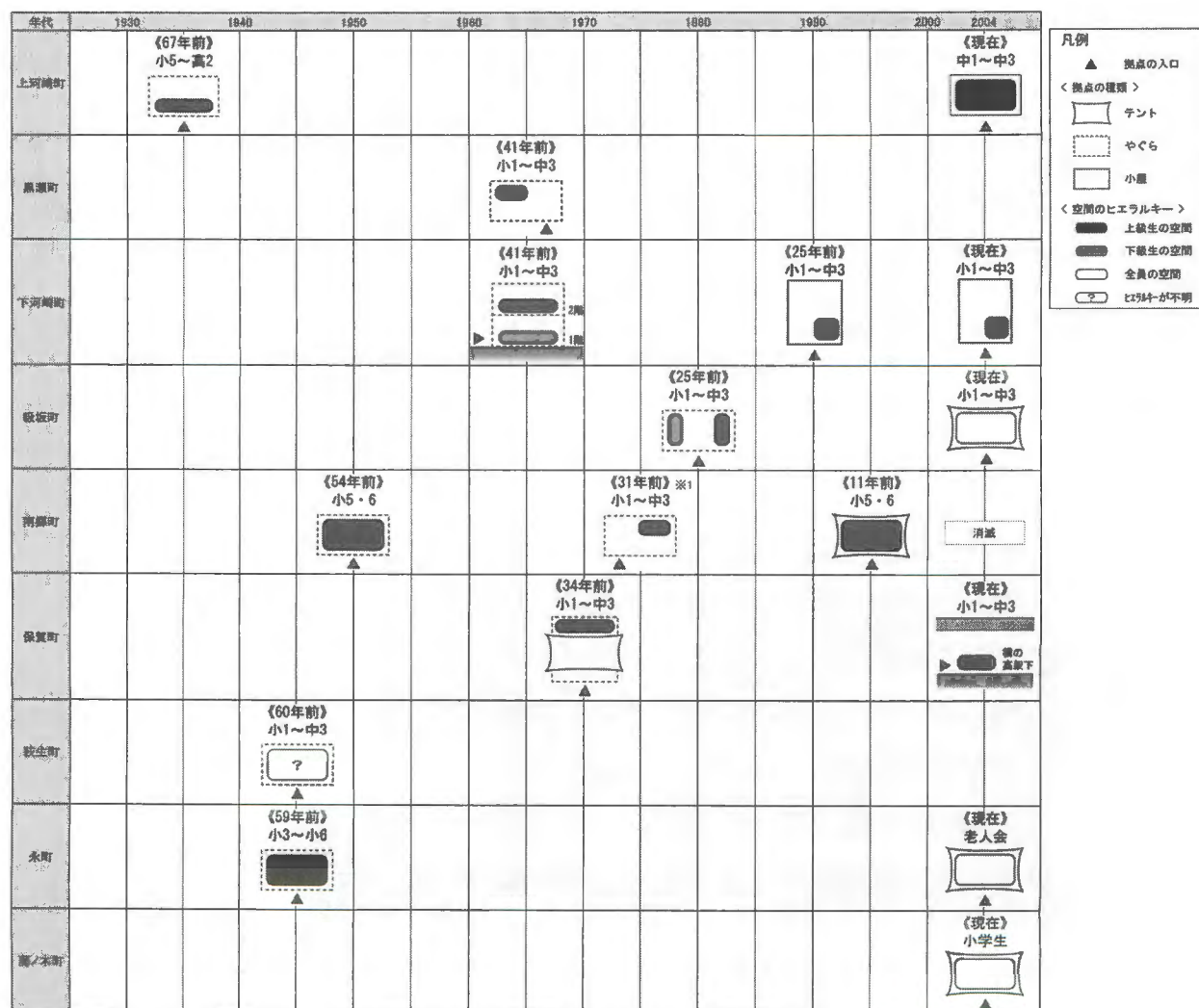
類し、地蔵盆の変遷を分析する。

#### ①子ども主導型

子どもだけで行事を実行する型であり、加賀市における地蔵盆の伝統的な実施方法である。子どもが運営等や参加の呼びかけを全て自主的にやり、大人は直接的には関与せず、行事で使用する道具等を貸す程度の最低限の関与に留まる。

#### ②大人主導型

実質的に大人が行事を実行する型である。大人が主体(自治会や参加できる大人)であり、子どもは自由参加でよい方針をとっている。



現在の拠点空間は現地調査にて、昔の拠点空間はヒアリング調査にて簡略図を作成した。

※1： 南郷町では、集落区域が広いため2箇所で行われており、当拠点空間のみ場所が異なる。また、現在においては両箇所とも地蔵盆が消滅している。

図 6. 象徴的空間構成の変遷図

### ③大人補助型

子どもの運営等に対して大人が補助して行事を実行する型である。子どもが主体となっているが、大人が一定関与をしている。関与の程度には幅があり、例えば、子供会が組織的に補助している例もあれば、補助できる者が個人的に行っている程度のものもある。この型は「子ども主導型」と「大人主導型」の移行段階に位置づけられ、先述した2つの型以外の中間にあるものである。

## 8-2. 主体の変化

図7は、ヒアリングに基づき時代毎に地蔵盆の主体の変遷を示したものである。従来農村地区では、大人が農業に一日中従事しており、普段から子どもも手伝うことが多かった<sup>注8)</sup>。このような状況からも、集落の公認を基盤としつつも、実質的に農村では地蔵盆の運営等は子どもだけで行わざるを得なかった。農村では70年代ごろまでは「子ども主導型」の伝統が継続していたことが読み取れるが、しかし時代が下るに従って、子ども主導型から大人補助型へ、さらに大人主導型へと大人の関与が大きくなる傾向にあることが分かる。なお、城下町である大聖寺地区の集落に子ども主導型が見られなかったのは、周辺にある農村集落を統合した際に農村の地蔵盆を模倣して取り入れた経緯があり<sup>注9)</sup>、「子ども主導型」の伝統が十分引き継がれなかったと推測される。

主体と象徴的空間の関係性を分析すると、やぐらを作っていた時は殆どの集落では「子ども主導型」であった。2004年、子どもが小屋等を借りて行っている集落では、基本的に自由に使用させていることもあり、「子ども主導型」となっている。しかし、テントを使用している集落では、「大人補助型」または「大人主導型」となっている。テントを使用することで大人の関与が生じ、それを契機に大人の関与が大きくなる傾向があり、結果的に象徴的空間において上級生の空間の弱体化を招いている。このように、主体と象徴的空間のあり方は密接に関わっている。

主体の変化の背景には、①少子化、②普段の遊びにおける異年齢集団の縮小、③大人の子どもに対する安全志向の強化、等がその要因として考えられる。①については、加賀市も少子化により、集落に地蔵盆を行う年齢の子どもが少なくなり、地蔵盆を運営するために必要な異年齢集団の規模が確保できなくなっていることがある。②については①とも関連し、2004年の子どもでは、行事を任せても物理的に運営等ができなくなりつつある実態がある。普段の遊び集団が同学年の少人数集団に矮小化したことにより、異年齢集団で行事を運営する力が継承されていないことが大きいと考えられる。③については、少子化等により子どもを大人の監視下に置くことで安全を確保しようとする傾向が強まっており、地蔵盆においても子どもだけでの行事に懸念を抱くようになっている。

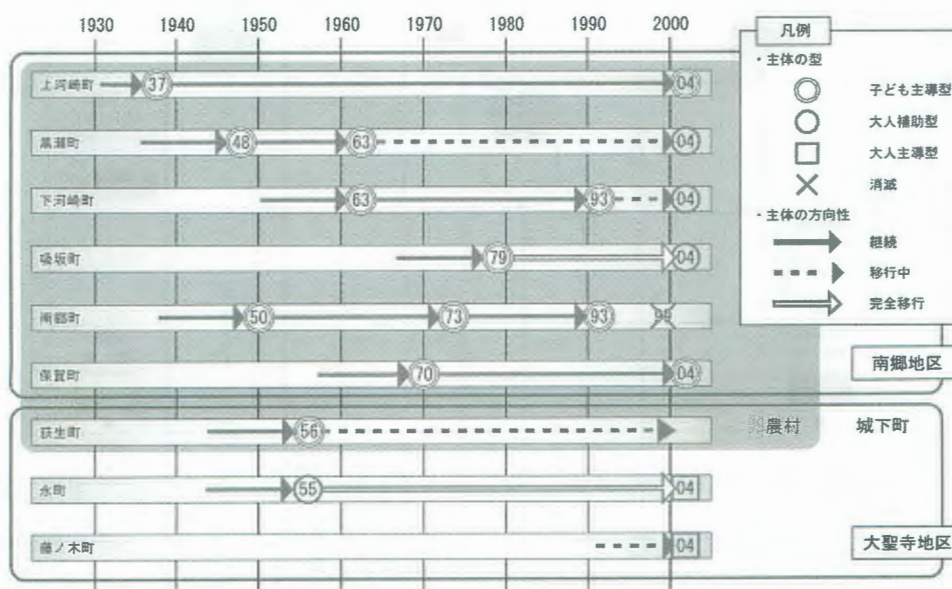


図7. 地蔵盆主体の変遷図



## 9. まとめ

加賀市における子どもの普段と地蔵盆時の遊びの関係性について時代を追って考察した。1970年代以前には、遊びについて10人を越える異年齢集団が健在で、地域の中でこの集団による多様な屋外的遊びが展開されていた。こうした日常遊びの中で培われた異年齢集団の力が地蔵盆でも発揮され、子ども主導型の地蔵盆運営を可能にしてきた。ところが現代では、普段の遊びが少人数の同級生集団となり、屋外的遊びが減ると共にその多様性も失われている。そのことが異年齢集団の力を弱め、「子ども主導型」の地蔵盆運営を困難にする要因の一つとなっている。

地蔵盆における主体の型を「子ども主導型」、「大人補助型」、「大人主導型」に分類し、その変遷を分析した。昔は、「子ども主導型」が主流であったが、近年においては、大人の関与が大きくなり「大人補助型」、「大人主導型」へ移行する傾向が見られる。その要因として、少子化による子ども集団の縮小、普段の遊び集団の矮小化による子どもの行事運営能力の低下とギャングエイジによる集団性の弱体化、等による大人による子どもの関与の強化等が背景にあると考えられる。

一方、2つの発達段階をまたがることで世代の多様性が確保される地蔵盆の遊び集団は、昔も2004年も、普段と比べて、多人数で幅広い異年齢集団となる傾向がある。そうした集団での遊び、行事運営の体験を提供する地蔵盆の存在意義は大きい。地蔵盆の特徴である象徴的空間については、昔はやぐらが作られ、子ども集団の上下関係を象徴する明確なヒエラルキー空間が形成されていた。2004年ではテントや小屋の既成物を使用しており、昔に比べるとヒエラルキーが曖昧となっているが、このヒエラルキー空間が2004年でも残っていることは注目に値する。

以上のように、地蔵盆が本来持っていた豊かな発達環境を保障する役割は、主体の変化や象徴的空間のヒエラルキーの希薄化が象徴するように、弱まりつつある。しかし、子どもの異年齢集団が矮小化している今であればこそ、益々地蔵盆のような行事が重要な意味を持つ。子どもによる主体性に重点を置き、継承・発展させることが望まれる。

## 10. 今後の課題

地蔵盆が果たしてきた発達環境を保障する役割を現代に継承するため、今後は時代に適合した対応が必要と考えられる。今回の調査で得られた知見を基に、いくつか対応策を提案する。

### ①隣接集落による合同実施

少子化により一定規模の子ども集団が成立しない状況に対しては、隣接する子どもが少ない集落同士が合同で実施する方法が考えられる。ただし、自治的コミュニティの単位を越える事への配慮が必要である。また、農村では各集落が離れているため物理的に合同実施は困難であり、城下町のみで可能な方法である。

### ②やぐら作りの復活

ヒエラルキー構造をもつ象徴的空間とその制作過程が、地蔵盆時の異年齢集団の成立と密接な関係性があることが明らかになった。現代の40才代以上の親世代にはやぐら作りの経験がある人がいることから、大人が本来の役割である上級生の代わりに子どもに技術を伝承することで、やぐら作りの復活は不可能ではないと思われる。自分たちの手で拠点を作り上げる体験は、異年齢集団による共同作業と連帯感の形成を促し、本来の地蔵盆による特別で貴重な役割を強化していき、この活動により子どもの主体性が回復する可能性もある。

### ③子どもの主体性を尊重した大人補助型の将来

本来の子ども主導型で地蔵盆を行うことが難しくなっている現状に対しては、子どもの主体性を尊重した「大人補助型」が現実的である。大人は必要な技術・知識を伝達しつつ、特にリーダーとなるギャングエイジの子どもの主体性を重視し、実際の作業や運営等は子どもに任せる方向を探る。同時に、その先の将来を見据えた方向性としては、「子ども主導型」を目指すことが望まれる。

本研究で考察してきたように、地蔵盆は集落をまとめる年中行事の総体の最初に位置付けられ、集落全体の自治とその住民との繋がりを背景とし、大人の理解を基盤に成立している子どものための行事である。今後は、集落の住民が自発的にまちづくり等を行い、集落の特徴を見出すことで、これまでとは違う新しい地蔵盆に発展する可能性がある。その上で、伝統行事や年中行事の存在意義・意味を再評価して、その背景にある子どもにとって大切な発達環境を保障することが望まれる。

注

注 1) 電子ゲーム

テレビゲーム、パソコンゲーム、携帯型ゲームの総称を電子ゲームとする。

注 2) 南郷地区・大聖寺地区

南郷地区は南郷町、下河崎町、上河崎町、吸坂町、黒瀬町、中代町、保賀町であり、大聖寺地区は冠に「大聖寺」が付される町は全て本地区（白望台のみは例外）である。なお、大聖寺地区の対象集落である町は大聖寺を省略するものとする。

注 3) 左義長

1月14日の夜または1月15日の朝に、その年飾った門松や注連飾り、書き初めで書いた物を持ち寄って焼き、その火で焼いた餅を食べる。無病息災を祈願する年中行事の1つである。

注 4) 報恩講

浄土真宗の宗祖親鸞聖人の命日をご縁としてその徳に感謝し、私自身が仏さまの教えを聞く集まりのこと。加賀市では年配の方が集まる年中行事として認識されている。

注 5) エリクソン(Erik.Homburger.Erikson. 1902-1994)の発達段階

精神分析学者のエリクソンは、社会的に達成すべき発達段階という観点から発達を捉えて独自の人格の発達論を完成させた。人生を8つの段階に分けて、各段階において「健全・不健全」あるいは「発達の成功・発達の停滞」といった対立する二つの特徴や傾向があるとして、各発達段階には固有の発達論的な危機があると主張した。

注 6) ハヴィガースト(Havighurst, R. J. 1900-1991)の発達課題

心理学者のハヴィガーストは、各発達段階において、獲得・達成することが期待され相応しいとされる課題があると提唱した。課題の根底にあるのは他人との情緒的なつながりを持つコミュニケーションスキルと両親からの精神的・経済的自立であり、その他には、自己に対する正直で健全な態度、倫理的な良心や謙虚さ、男性・女性の性役割の受容などがあったとした。

注 7) やぐら

周辺にある木材や竹等で作った簡易な小屋のようなもの。

注 8) 昔の農村の子ども

昔の地蔵盆実態ヒアリング調査の結果により、9事例中、家業の手伝いをしていたのは8人である。

注 9) 大聖寺地区の集落統合

大聖寺地区の周辺にある集落を統合している江戸時代において大聖寺藩として城下町であった区域は、2004年における大聖寺地区の基盤となっているが、厳密には同じではない。「加賀市史（加賀市史通史上巻：加賀市史編纂委員会編，加賀市，1975-1979）」によると、明治17年に戸長管轄区域の改正並びに民選の戸長選挙法廃止に伴う戸長役場の統合の記録により、大聖寺藩城下町の区域が確認できる。つまり、それ以降に大聖寺地区に含まれた集落（荻生町、上福田町、下福田町）は統合により追加されたものである。また、本来の大聖寺区の周囲には城下町を示すための地蔵が設置されていた可能性が高く、城下町の地蔵盆とはこの区域周辺に祀られていた地蔵を所有する集落と推測される。

参考文献

- 1) 田丸敏高、河崎道夫、浜谷直人：子どもの発達と学童保育，福村出版，p71～73，(2011)
- 2) 竹内泰、布野修司：京都における地蔵の配置に関する考察，日本建築学会計画系論文集，520号，p263～270，(1999)
- 3) 野口美智子、高橋一雄：京都における地蔵盆の開催空間－近隣空間の研究（2）－，日本建築学会大会学術講演梗概集，計画系54，p1161～1162，(1979)
- 4) 野口美智子：近隣空間の研究－京都西陣における地蔵盆の演出空間－，日本建築学会大会学術講演梗概集，計画系53，p1087～1088，(1978)
- 5) 西村信治、室崎生子、森靖夫：地蔵盆を通してみた地域の子供の発達保障の空間づくりに関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，F，p333～334，(1986)
- 6) 仙田満：子どもとあそび，岩波新書，p172～175，(1992)
- 7) 藤本浩之輔：子どもと遊び，第一法規，日本の子どもの歴史7第3章，(1977)
- 8) 小森秀三：加賀市地蔵等分布図・一覧表，加賀市教育委員会，(1980)
- 9) ギャングエイジ  
田丸敏高、河崎道夫、浜谷直人：子どもの発達と学童保育，福村出版，p28～29，(2011)



## 地蔵盆にみる異年齢集団による子どもの発達環境

### —加賀市の南郷地区・大聖寺地区を事例として—

中谷 崇，小伊藤 亜希子

**要旨：**子どもにとって、異年齢・多人数の集団と関わり持ち、外で遊ぶことは、現在でも大切なことである。本研究は、子どもだけで行う加賀市の地蔵盆という行事に着目して、発達環境を保障するため、その仕組みと役割を分析し、評価しようとしたものである。本地蔵盆は子どもにとって初めて2つの発達段階を経由する、異年齢集団で行う行事である。子どもにとって普段の遊びは、昔に比べて屋内的遊びが増え、遊び集団は同年齢、小規模である傾向が強いが、地蔵盆時には普段とは異なる集団が形成され、多くの経験を得る大変貴重な場となっていることが示された。地蔵盆では、その活動拠点の場が存在するが、そこには異年齢子ども集団のヒエラルキーを象徴する空間が発現していることも分かった。しかし、近年では、普段の遊び集団の変化と深く関連してこのような空間も弱体化する等から分かるように、昔のように地蔵盆を子ども主体で行うことが困難になってきている。また、主体のあり方によって各集落の地蔵盆を3つの型に分類し、その変遷を分析した結果、「子ども主導型」から「大人補助型」へ、さらに「大人主導型」へと移行する傾向が認められた。近年では地蔵盆の発達環境に関わる機能は低下しているものの、異年齢集団の遊び体験が減少している現代の子どもにとっては益々必要な環境であることから、いくつかの改善策を提案した。